道徳学習指導案

指導者　隆杉　佳代

1　日　　時　　平成 24 年 11 月 19 日（月）

2　学　　年　　第２学年２組　21 名　　［２年２組教室］

3　主　題　名　　あたたかい心で［２－（２）思いやり・親切］

4　資　料　名　　「くりのみ」（出典「あすを見つめて」日本文教出版）

5　主題設定の理由

○　よりよい人間関係を築くには，相手に対する思いやりが不可欠である。思いやりとは，相手のことを考え，自分の思いを相手に向けることである。それは，温かく見守り，接することや，相手の立場に立った励ましや援助などを含む親切な行為などとして現れることが期待される。特に，学校においては，多様な人との直接的なかかわり合いの機会を多くし，人間愛を根底とした思いやりや親切な行為の意義を実感できる機会を作っていくことが重要である。そのため，身近な人に広く目を向け，温かい心で接し，親切にすることの大切さについて考えを深められるように指導する必要がある。特に，身近にいる人とのかかわりの中で，相手のことを考え，優しく接し，具体的に親切な行為ができるようにすることが求められる。

○　本学級の児童は,友だちが困っていると優しく声をかけたり,手伝ったりしている児童が多い。また，優しくしてもらったことを嬉しく思い，帰りの会等で積極的にみんなに伝えようとしている姿も見られる。しかし，１年生と一緒に運動会の練習をしていても，１年生が困っていることに気付かず，自分から声をかけることも少ない。自分のことが中心で，身近な人に目を向けきれていないことがある。また，遊びに夢中になっていると，注意してくれている友だちの言葉に耳を傾けず，自分がしたいことを優先して遊んでいる姿も見られる。相手の立場に立って考えることができていない児童が見られる。

　困っている子がいたらどうするのかアンケートをした結果，助けると答えた児童が 86%（18／21 人），大丈夫か声をかけると答えた児童が 14%（3／21 人）であった。困った子を見かけたときに，全ての児童が力になりたいと思っていることが分かった。また，親切にしていない子の気持ちを考えさせると，自分がしたいことを優先させたい児童と，相手の気持ちも分かるが自分がしたいことを優先させたい児童がいた。これらの結果から，児童は親切にすることはいいことであり，親切にしたいという気持ちは持っていることが分かる。しかし，自分がしたいことが目の前にあると，それを優先させたい気持ちが強く，親切にできない実態が明らかになった。

○　本資料は，冬のある日，食べ物を探しに出かけたきつねが，たくさんどんぐりを見つけ，腹一杯食べて帰る途中，うさぎに出会い食べ物がないと嘘をつく。食べ物がないきつねを気の毒に思い，やっと見つけた二つのくりのみの一つをきつねに差し出してくれるうさぎの優しさに触れ，きつねが涙を流すという内容である。このように，うさぎの優しさに涙を流すきつねの思いを話し合うことを通して，相手の立場に立って思いやり，困っていたら助け合っていくことの大切さ

を考えることができる資料である。

指導にあたっては,導入で写真や風の音などから,冬山の食べ物が少ない厳しさをつかませる。そのような中で，やっと見つけた食べ物は，とても貴重な食べ物であることを理解させる。基本発問では，落ち葉でどんぐりを隠しているときのきつねの気持ちを話し合い，どんぐりを独り占めしたいという思いに共感させる。中心発問では，きつねの目から涙がこぼれたときの気持ちをワークシートに書かせ，やっと見つけたくりのみを差し出してくれたうさぎの優しさに気付かせたい。役割演技をするなかで，嘘をついて独り占めするよりも，相手のことを思い，親切にすることの素晴らしさを感じたきつねの気持ちに寄り添わせていく。そうすることで，親切にすることのよさを感じ，これから親切にしていきたいという気持ちを持たせる。展開後段では，自分の生活を振り返り，親切にしてもらって嬉しかった経験を話し合う。親切にしてもらった経験だけでなく，もう少し相手のことを考えて親切にできるとよかったと思うことも話し合うことで，これからの日常生活に生かしていけるようにさせる。終末では，日常の生活の中で見つけた児童の親切な言動を，児童に伝えることで親切にしようという意欲をより高めさせる。

6　準備物

資料，挿絵，短冊，ワークシート

7　ねらい

○　目から涙が落ちてきたきつねの気持ちを話し合うことを通して，親切にすることのよさに気付き，身近な人へ親切にしようとする道徳的心情を育てる。

8　本時のポイント

目から涙が落ちてきたきつねの気持ちをワークシートに書き，一人一人が自分の思いを持つことができるようにする。そして，役割演技をすることで，思いやりのあるうさぎの行動に涙を流したきつねの気持ちに共感できるようにする。

9　指導過程

段階	学　習　活　動	主な発問と児童の心の動き	指導上の留意点
導入	1　冬山に住む動物の様子を考える。	○冬の間，山にいる動物たちはどんな暮らしをしていますか。 ・寒いからじっとしている。 ・少ない食べ物で暮らしている。	○　厳しい冬山の様子を想像できるよう，風の音を流したり，写真を見せたりして，冬の生活は，食べ物が少ない状況をとらえさせる。
展開前段	2　どんぐりを隠しているときのきつねの気持ちを話し合う。	○落ち葉でどんぐりを隠しているとき，きつねはどんなことを考えていたでしょう。 ・誰にも，見つかっていませんように。 ・たくさんどんぐりを食べることができて嬉しいな。 ・これで，またお腹いっぱいどんぐりを食べられる。	○　たくさんのどんぐりを見つけて喜んでいるきつねの気持ちをとらえる。 ○　どんぐりを自分のものだけにしたいきつねの気持ちを押さえる。

	3　「何も見つかりませんでした。」と言ったきつねの気持ちを話し合う。	○「何も見つかりませんでした。」と言ったきつねは，心の中でどんなことを思っているのでしょう。 ・ぼくだけのどんぐりだから，誰にも教えたくない。 ・せっかく見つけたのに，うさぎに言ったら，ぼくのどんぐりが少なくなってしまう。	○　嘘をついてどんぐりを独り占めしたいというきつねの心の弱さに共感させる。
	4　目から涙がこぼれたときのきつねの気持ちを話し合う。	◎きつねの目から涙がこぼれたとき，心の中でどんなことを思っていたでしょう。 ・嘘をついて，ごめんなさい。ぼくが食べることしか考えてなかった。 ・うさぎさんがやっと見つけたくりだから，もらえないよ。 ・うさぎさんは，ぼくが食べるものがないから，自分も食べたいのにくれた。 ・ぼくも，うさぎさんのように，優しくしたい。	○　役割演技をする前に，きつねの目から涙がこぼれたときの気持ちをワークシートに書かせる。 ○　きつねの気持ちに共感させるため，教師がうさぎ役，児童がきつね役になって役割演技をする。 ○　涙の理由を考えさせることで，うさぎがしてくれた親切な行動に心を打たれたきつねの気持ちに共感させる。 ○　うさぎの立場に立ってきつねの気持ちを言っている児童の発言を学級全体へ広げ，相手のことを思って行動するよさに共感させる。 ○　役割演技の中で，教師がうさぎの気持ちをつぶやくことで，うさぎにとっても大事なくりのみであることに気づくようにさせる。 ○　うさぎが笑顔でくりのみを渡している姿から，嘘をついて一人で食べるよりも，親切にした方がもっと気持ちがいいことに気付くかせる。
展開後段	5　今までの生活を振り返る。	○親切にしてもらったことや，もう少し親切にできたら良かったと思うことはありますか。 ・給食の食器を割ったときに，高学年のお姉さんが「大丈夫だよ。」と言って一緒に給食室についてきてくれて嬉しかった。 ・友だちが消しゴムをなくして困っていたのに，気がつかなくって遊んでしまった。今度から，声をかけていきたい。	○　親切にされたときの嬉しかった経験から，親切にすることのよさを感じ，これから親切にしたいという意欲を高める。 ○　今までの自分を振り返り，「自己モニター」「他者視点」を意識してワークシートに書かせる。 ○　嬉しかったことを書けた児童には，親切にできるとよかったことも書くようにさせる。
終末	6　教師の説話を聞く。		○　日常の生活の中から児童の親切な言動を見つけて，児童に伝えることで親切にしようという意欲を高めるようにさせる。